

日本労働年鑑 第28集 1956年版
The Labour Year Book of Japan 1956

第二部 労働運動

第三編 農民運動

第五章 農村青年運動

第三節 日農青年部結成全国大会

一九五四年三月二、三日東京において統一派日農青年部結成の全国大会が開催された。青年部結成は昨年のもので決議され、その後中央地方で準備をつづけてきたものであるが、本大会には北海道、東北、北陸、中国、九州等各地方代表九九名が参集し、本部一般報告とその討議、行動綱領の決定等を行い、正式に青年部を結成した。大会には日本共産党松本三益氏ほか多数の人から祝辞、祝電が寄せられた。一般報告、行動綱領、活動方針は次の通りである。

(一般報告)

いま日本の農村では、耕作したくても土地がなく、働こうとしても職のない青年があふれている。この青年たちは、心の中で平和をのぞみながらも口べらしと、いくらかでも金をとるために保安隊や、電源開発、基地建設にひきだされていく。福島県のある郡では一昨年に比べて昨年の秋には、保安隊の志願者が六倍にふえ、鳥取県船岡町の青年団の世論調査では、警官、保安隊の志願者が第四位を占め、約一七パーセントにおよんだ。この志願者のうち、九八パーセントは失業、半失業者であり、のこりの二パーセントは地主、富農の子弟であった。佐久間ダムなどの電源開発には、産業開発青年隊の名であつめられた青年が三百円にみたない低賃金で命を危険にさらしながら働いている。大分では青年の活動家さえ、二十名の青年と共に軍事基地の建設にでかけた。ここには労災保険もなければ満足な休日もない。

東北六県では、昨年の冷害によって五割以上減収になったところは、二〇三五ヶ町村にもなり、長欠児童は三万名にのぼっている。福島では四百戸が、青森では二六五戸が職を求めて一家で移住していった。

この中でさいきん急速に地主による土地とり上げがふえてきた。軍事基地もへるどころかふえる一方である。

半封建的土地制度の強化と共に、青年の自由を求める要求はおさえつけられ、希望を失った青年には、アメリカ製の植民地向けエロ、グロ文化がおしつけられ〔青年はヒロポンなどに毒され、婦人は売淫をよぎなくされている——このカッコ内は討論で追加された部分、以下同様〕

投げ出されているのは次、三男ばかりではない。営農資金も借りられない貧農は飯米まで売って当面をしのがなければならず、米をつくっている農村でも粉食をよぎなくされている。

こうした状態は日本の一部の状態であろうか、そうではない。多かれ少かれ日本の全農村をおそっている問題であり中農層も転落の一途をたどっている。このような農村の苦しみはどこからおこっているのだろうか。それはアメリカ帝国主義者と吉田売国政府がおしすすめている戦争政策の結果である。アメリカ帝国主義者は、日本の半封建的土地制度を維持し、農村の反動勢力の力を温存し、これを強化してきた。

いま吉田政府はMSAをうけいれ、ぼう大な軍事予算をくみ、農林予算をへらし、アメリカのあり余った小麦輸入によって、国民の食生活から米をうばい、農民の食糧増産、土地改良をなげすてて、農民から土地と米をうばいとる政策を強行している。半封建的地主勢力は基地をさそいこみ、不況のドン底においこまれた青年を保安隊や、産業開発青年隊、軍需工場などに安い賃金でかりたて、アメリカの御用にたてる二十五万の軍隊をつくろうとしている。これはまた労働者階級の植民地的な低賃金と職場のファッショ支配を独占資本家にゆるす最大のよりどころである。

目にあまる汚職はまったく国民の生活と平和と民主々義をふみにじり、アメリカの戦争政策に奉仕する吉田自由党政府と占領制度の底しれないフハイをバクロしたものである。

しかしながらこのようなアメリカ帝国主義者と吉田売国政府の兇暴な政策は、決してかれらが強いことを証拠だてるものではない。話し合いで国際間の争いを解決しようという全世界の平和を愛好する国民の力は、ついに朝鮮戦争ならびにヴェトナム戦争の平和的解決を主とするジュネーブ会議をひらくようにした。また七月にひらかれる世界平和大集会をめざして全世界の平和愛好民主勢力はふたたび戦争と原爆、水爆による惨禍がおこらないようにしようと国際的な力の結集をつよめている。

平和がくることをなによりもおそれるアメリカ帝国主義者は、中華人民共和国がジュネーブ会議の成功をさまたげているように宣伝しているが、ちょうどそのころ、ビキニでおこなわれた水爆の実験で日本は三度目の惨禍をうけた。この事件は、日本の国民に限りない憤激をまきおこした。そして原水爆禁止を要求する声は日本のすみずみにまで高まった。

このようにアメリカの戦争挑発と戦争政策は平和をのぞむ諸国民からつよい反撃をくっている。この反撃をおさえ、各民族を支配するため、アメリカ帝国主義者と吉田売国政府は、ひとにぎりの独占資本、反動勢力、地主勢力と手をつなぎ、あらゆる手段で国民をごまかし、「一粒でも多くの米を」と努力する農民の運動にまでスパイの目を光らせ、合意とみせかけた土地とり上げを援助し、国会は国民をうらぎって秘密保護法、教員政治活動禁止法の制定、警察法の改悪などを強行し、MSA再軍備のための地固めをしようとしている。

アメリカと吉田政府の政策をうち破るための国民の力はまだ充分とはいえないが、一步一步力づよく前進している。農村青年、とくに戦争と窮乏の一番のぎせいになる貧農半プロは、圧迫をうち破って各地でたち上りつつある。国鉄、炭労、その他の労働者のたたかいは大きく前進し、家族も一緒になったねばりづよい長期の闘いがつづけられている。こうした労働者諸君と手をむすんで農民のたたかいも、昨年から今年にかけて非常に前進した。

内灘、浅間、妙義の軍事基地反対の闘い、山林解放、土地とり上げ反対の闘い、仕事

よこせのたたかい、産業開発青年隊の奴隷的労働条件改善のたたかい、民主的文化を守るたたかい、青年の自由と権利を戦争とファシズムから守るたたかい、水害、凶作に対するたたかいなどのなかで農村青年は労働者諸君と統一行動をふかめた。

昨年十一月長野でひらかれた凶作突破青年平和大会での話し合いは、農村青年、労働青年、学生諸君の間に、共通な悩みや、くらしみがあることをあきらかにした〔これら労、農、学青年の結びつきはその後、さらに発展している〕。

昨年八月の日農大会の決定によってうまれた青年部準備会の活動の中でこの経験はひろめられ、北海道、〔秋田、岩手〕、宮城、〔群馬〕栃木、茨城、神奈川、長野、福井、静岡、〔新潟、京都〕大阪、〔鳥取〕、大分、〔福岡、宮崎〕の各県ではすでに闘いの中から組織が生れてきている。

〔地方からのいくつかの報告によれば〕群馬では村の青年がひらいた基地報告会を警察が弾圧しようとしたが国鉄労働者諸君が先頭に立って抗議した。大分では広汎なサークル活動を通じて婦人労働者諸君との結びつきや地域青年団との行動の統一をつよめ、鳥取では自労のたたかいの中で農民組合がつくられていった。三重では青年を先頭とする自労の人たちが農村青年の組織を考え、経済研究会がもたれている。労働者階級の指導のあるところではこの農村青年のたたかいも強固に組織されつつある。

われわれの苦しみの根源であるアメリカ占領制度と半封建的土地所有制度をうち破ることができるかどうかは労働者階級と提携した、われわれ農村青年の肩にかかっている。ここに農村青年の統一行動の推進体となり、労働者階級とガッチリ手をむすび、貧農、半プロを中心とした、まじめなあらゆる農村青年団結の推進力として、日農青年部がはたす尊い使命がある。

たんに労働者、学生だけでなく、中央、地方を通じて地域青年団、農協青年部の諸君との統一行動も発展した。地域青年団の中央組織である日青協は、憲法にもとづく政治教育、軍事基地の実態調査、世界の平和は話し合いで解決しろ、官僚的青年学級法制化反対、国際農村青年会議準備会への代表派遣などをきめている。農協青年部も凶作対策の中で飯米確保、なっとくできる供出、営農資金よこせ、肥料、種子をただで配給せよ、共済金をすぐ払え、農薬の全額国庫助成、次三男対策として恩賜林を払い下げろなどを要求して闘っている。またイタリヤの兄弟たちのよびかけにはじまった国際農村青年会議の準備のために、各地で青年団、農協青年、さらに労働青年と協力して〔日農青年部は〕その先頭に立っている。

われわれが国内外のたたかいからけんきよにまなび、その同志的団結をかためてたち上りつつあることは、戦争とファシズムの嵐にたちむかい、ゆたかな生活と平和と民主主義をめざしてたたかう日本国民の力を飛躍的におしすすめるいしずえとなるであろう。

日本労働年鑑 第28集 1956年版

発行 1955年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2002年3月5日公開開始

